

中国語「読める力」養成講座（中国語・書き言葉「論説体」読解コース）
——受講生の方々へ

三瀨正道（麗澤大学）

はじめに

「レベル式」トレーニングは現在では他大学はもちろん、市民向け講座・企業人向け訓練講座・全国ネットでの通信教育に発展し、毎年延べ300人以上が受講しています。

[一]早期の読解力養成の意義

かなりの人が持っている2つの誤解があります。1つは、「中国語の発音や会話もできないのに読解力が身につくはずがない」というもの、今1つは、「日本の英語教育は過去、読解力の養成にのみ傾き、その結果が「会話に弱い日本人」をつくってしまった。したがって、中国語教育においてもまず、会話力をしっかり養成しなくてはならない」というものです。

前者については、この「レベルシステム」の成果がその誤りを証明しています。発音や会話力と論説体読解力の向上には顕著な関連性もなければ、学習上のあるべきプライオリティもありません。麗澤大学の実践で証明されたことは、大学に入学して初めて中国語を学んだ学生でも、2年生になって真面目に取り組めば1年間でほぼ新聞を読めるようになってしまう、ということです。

これによって麗澤大学の学生の場合、3年生からの後期課程で、原文で書かれた文章やインターネットを駆使して研究が進められるようになり、日訳資料にばかり頼らざるを得ない状況から脱することが可能になりました。

後者は、コミュニケーション力を重視した考えによるもので、過去にはそれなりに説得力がありました。しかし、現代のようにインターネットが発達し、ネットを通じてのコミュニケーションや情報収集活動が飛躍的に発達する中、「読めること」の重要性も以前とは比べものにならないほど高まっています。

昨今、多くの日本の大手企業が中国に進出していますが、そのような企業でさえ、中国の新聞や専門業界紙あるいはインターネットから直接情報を取れる日本人社員は数えるほどしかなく、ほとんど養成もしていません。情報を先取りする重要性がますます高まっている今日、この状況は何とか打開しなければいけません。

[二]レベルシステム開発の動機

筆者が大学で中国語を学んだ1960年代の中国語教育は、現代中国語を話し言葉と書き言葉（ここでは特に論説体を指す）に分けてその違いを明確に教える授業はほとんどありませんでした。したがって、学生は初歩的な会話表現や会話文を学んだ後、すぐに人民日報などの文を与えられ、特に話し言葉との違いを喚起されることもなく学習しました。英語においては既に時事英語というのが1つのジャンルとして確立されていましたが、当時の中国語教育は其処まで進化していなかったのです。

そこで私は中国語教員たるものの責任として「何としても教室で学生にその違いをはっきり教えなければならない」という認識を持つようになり、レベルシステム開発に取り組みました。

[三]システムの開発へ

1) センテンスへの分解

文章をそのまま学生に配布して頭から読解していくというやり方を変えようとする、当然のこととして、ばらばらの文に分解してまずセンテンスの読解から、ということになります。しかし、中国語の最大の特徴の1つは意合法にあります。日本語では、

「私は腹が減った。しかし金がない。ところがあなたはお金を持っている。だから、もしあなたが私と一緒に食事に行って、おごってくれるなら、私はとても幸せだ」

と言いますが、中国語はこうは言いません。短いフレーズの接続は意味の流れから汲み取ればいいので、いちいち接続詞を入れれば却ってくどい文章になります。そこで中国人はこういった文を日本語で言うとき、中国語の語感そのままに接続詞を省略し、ついでに面倒くさい日本語の助詞も省略します。

「私、腹減った。金ない。あんた、金ある。一緒食べ行く、あんた、おごる、私、幸せ」

この点から考えると、中国語ではまずフレーズとフレーズのつながり方を読み取ることが非常に重要になってきます。文と文とのつながりはその延長上にある。そこで、この点を踏まえ、文を選び出すときに細心の注意を払うことを前提にセンテンスの切り取りを断行し、結果は、このことが大きな問題としてクローズアップされることはありませんでした。

2) 材料の調達

論説体となれば当然新聞か雑誌になりますが、改革開放が始まり次々と新語が出現する中で、それが恣意的に作られ泡沫のように消えていく新語なのか、それとも認知されて教材として扱う基準に適している語かの判断が求められました。ならば新語に対し相応のチェックが行われている人民日報が最適、ということになりました。

3) 進歩の度合いを確認するシステム

受験勉強で国語や英語の読解力を強化しようとしても、自分の進歩が目に見えてわかりにくいため、自分が今行っている勉強方法に疑問と不安を持ち、モチベーションの持続に悩んだ経験を持つ人は多いでしょう。

この不安を解消してやる気の持続を図らなくては、どんなにいい教育方法も絵に描いた餅です。そこで考えたのがレベルを設定し、一定の成果を挙げたら次のレベルに進める、という形で達成感を持つことでした。

4)難易度の設定

ヒントになったのが上述の意合法です。どんな言語でもセンテンスが長くなればそれなりに難易度が増しますが、日本語のように接続詞が完備されている言語では、文が長くなることによってさほど急激に難易度が上昇することはありません。しかし中国語の場合は文が長くなればフレーズが増え、意合法ゆえにそのつながりを読み取る能力が要求される度合いも急激に高まります。

こういった判断から、文の長さを難易度を定める物差しとして採用することにしました。そこで人民日報の文の長さを字数によって調べてみると、大まかな比率は以下のようになりました。

0～30 文字： 31～50 文字： 51～70 文字： 71～90 文字： 91 文字以上
1 : 2 : 1.5 : 1 : 0.5

その後、人民日報から毎週の問題を抽出する作業を長年続けてわかったことは、やはり基本的な長さは40～80文字前後であること、政治・思想・文学批評のような文章は100文字以上もかなりあるが、一般記事の歯切れの良い文章は概ね20～60文字程度で、100文字以上の文はまずお目にかからない、ということでした。

こうして、文の長さによってレベルを5段階（20文字前後/40文字前後/60文字前後/80文字前後/100文字前後）に分け、更に同一の長さでも文構造の難易度によって2段階にわけ、以下のような10段階をセッティングしました。

レベル1： 1センテンス 20文字前後。	構文が比較的易しい。
レベル2： 1センテンス 20文字前後。	構文が比較的難しい。
レベル3： 1センテンス 40文字前後。	構文が比較的易しい。
レベル4： 1センテンス 40文字前後。	構文が比較的難しい。
レベル5： 1センテンス 60文字前後。	構文が比較的易しい。
レベル6： 1センテンス 60文字前後。	構文が比較的難しい。
レベル7： 1センテンス 80文字前後。	構文が比較的易しい。
レベル8： 1センテンス 80文字前後。	構文が比較的難しい。
レベル9： 1センテンス 100文字前後。	構文が比較的易しい。
レベル10： 1センテンス 100文字前後。	構文が比較的難しい。

5)難易の尺度

添削を続けるうちに「学生が何を難しいと感じ、また何処で間違えやすいか」が次第に明らかになり、それによって易しい文、難しい文の尺度も変化していきました。学生が難しいと感じる原因には少なくとも以下の諸要素があります。

①中国語は字が一定間隔で並んでいる。したがってどれが単語かが見分けられない。

例：发展中（発展の中で）

发展中国家（中国を発展させる）

发展中国家（発展途上国）

②中国語は形態変化がないため、品詞の区別が難しく、文の成分の判別も難しい。

例：科学发展→「科学が発展する」か、それとも「科学的発展」か。

③構文を知らない。

例：“要～、要…”は「～しようとするなら、…しなければならない」

④論説体独特の文法や修辞法を知らない。

例：“的”の省略。書き言葉の場合、短いフレーズの中に複数の“的”を用いることを非常に嫌う。したがって、“的”が複数ある場合は最も重要な1つを残し、他は省略する。標語や法律名などになるともつと極端で、全く“的”を使わない場合もある。

⑤ある語彙についての先入観による誤訳。

(ア)日本語と同一表記のため、日本語の意味で解釈してしまう。

例：“部署”をすべて「部署」と名詞に訳す。動詞である可能性を考えない。

“协议”を「協議」と訳す。「合意」「協定」という訳語が出ない。

(イ)既習語彙の場合、前出の意味で解釈し、他の意味を考えない。

例：“会”を「できる」、「不能」を「できない」と訳し、「～のはずだ」「～してはいけない」という訳語が出ない。

⑥時事用語を知らないためわからない。

例：“基地”はアルカイダ。

⑦社会の事象に対する知識が欠けているためわからない。

6)各レベルの1回の出題数

合計字数などを考え、レベル1と2は4題、レベル3と4は3題、レベル5以上は各2題としました。

7)採点基準

以下の基準で行っています。

- －0.1：簡体字の直し忘れ。軽微な漢字の書き違い。説明訳。
- －0.2：助詞の間違い（「が」と「は」の間違いなど）。単語訳の軽微なズレ。
- －0.3：単語の完全な意味の取り違い。単語の訳し忘れ。
- －0.4：同上がフレーズレベルで他に影響を与えている場合。
- －0.5：フレーズレベルでの構文の取り違い。動詞や介詞の係る範囲の間違いなど。
- －0.7：文全体の構文を取り違えているが、何とか大意はつかめる場合。
- －1.0：文全体の構文を取り違い、文意が伝わらない場合。
- －1.5：2つの構文が同一フレーズ内で絡み合った文で、両方の構文を読み違えている場合。
- －2.0：あるフレーズの訳が全く欠落している場合。

[四]競技ルール の 確立

以下は、〈入門者コース〉を修了した後にチャレンジする本格コースの説明です。共通部分は下線を施してあります。

〈入門者コース〉も、基本的にはこのルールに従って運用されます。

1)1 クールの回数

本格コースは15週を基本としています。

1つのレベルの合格基準は10点満点で、8.0以上だった場合に上のレベルへの進級が認められます。レベル4をクリアすると初級レベルを卒業、レベル8をクリアすると中級卒業といってよいでしょう。

2)時間配分とその他のルール

持ち時間は各時間も含めて1時間。辞書でもインターネットでもなんでも使用可。ただし、他人に聞いてはいけません。

ルール

- ① ワンクールが15回で構成されています。毎年度2回、開講されます。前期は4月から15週、後期は10月から15週です。
- ② 第1回は全員レベル1からスタートします。〈入門者コース〉修了者も同様です。
- ③ 各レベル10点満点で、8.0点以上だと次のレベルへ進めます。その日、最初にスタートしたレベルの結果が1.9以下だと、1レベルダウンします。
- ④ 1つのレベルをやり終わり、時間と自信のある人は、次のレベルに手をつけてください。うまくいけば1回で何ランクもアップできます。なお、次のレベルの結果が1.9以下でも、採点されているということは、前のレベルが合格ということですので、当然、次回は、その1.9以下だったレベルから始められます。
- ⑤ いくらたくさんやってあっても、前のレベルが合格しない限り、次のレベルは添削しません。
- ⑥ レベル10を突破すると、また、レベル1へ戻ります。その際、合格ラインは9.0以上になり、便宜的にこのレベルをレベル11~20と呼びます。レベル20を突破すると、またレベル1へ戻ります。その際、合格ラインは9.5以上になり、便宜的にこのレベルをレベル21~30と呼びます。
- ⑦ 15回でレベル30を突破できなかった人は、次回また、レベル1からの挑戦になります。

[五]レベル授業の成果

1)学生の実力の向上

レベル10突破の実力は相当なもので、東京の某大学では、同大学や他大学の大学院を中国語で受験したい学生が過去相当数授業にもぐりこんできましたが、レベル10を突破した学生で不合格になった者は1人も報告されていません。

また、現在まで、東洋史とか中国の経済や環境問題を研究している幾つかの大学の院生が、さらに読解力を高めたい、と参加しましたが、留学歴が有り、HSKで8級以上を取得していても、まず、レベル10にすぐには合格しません。

その後、平成5年の2学期からレベル11～20が設定されました。基準は上述のとおりです。それから5年して、またレベル21～30が誕生しました。

2) 社会人への波及

平成10年ごろから大学の授業に社会人の聴講生が増え始め、その中から漸くレベル30突破者が現れたのが平成14年でした。突破者から更に勉強を続けたい、という要望が寄せられ、平成16年に発足したのが而立会で、レベル30突破に因み、孔子の言“三十而立”から命名されました。

社会人、特に企業人の研修も始まりました。中国ビジネスが盛んになるにつれ、企業でも「読める人材」育成のニーズが高まり、数年を経て、ここからもレベル30突破者が出ました。いずれも社内で中国語学習を始めてわずか数年の人たちです。

その効果は劇的で、読めることでインターネットから自由に中国語でニュースや情報を獲得できるようになり、その結果、現地からの情報の質を厳しくチェックできるようになりました。特に特許関係の部署では、それまで中国人任せだった資料の解読にレベル学習者が参画しつつあります。また、中国との交渉においても、日本人社員が文書チェックできるようになり、モチベーションが上がっている、という報告がありました。

ただ、企業の場合、問題点もあります。企業人の場合、レベルをやって3年目になると飛躍的に力が伸びますが、ほとんどの企業が上司の許可が2年までで、そこで打ち切られてしまいます。いよいよというところでそれまでの研鑽が全て水の泡になる。この点の理解をどうやって深めていくかは今後の大きな課題でしょう。

一般人の通信による参加者も増え、官庁、通信社、教員、通訳者、翻訳者、編集者、企業幹部など既にプロとして活躍している人の参加も増えています。目に見える実践的な養成システムが求められている証左と言えましょう。